

「日本基督同胞教会史」研究会
機関紙『同胞』を継続して読む
～第239号(1929年)から第254号(1931年)まで～

柳井 一朗

はじめに

2021年度に「日本基督同胞教会研究会」が組織され、共同研究が続けられてきました。

私は2024年9月10日、第11回研究会の発表を担当しました。この発表を振り返り文章にまとめてみました。

私は、1963年に岡山県岡山市で生まれました。1989年同志社大学大学院修了の後、日本基督教団教師として、35年間教会で牧会に携わってきました。紅葉坂教会（横浜市）、鴨東（おうとう）教会（京都市）、洛西（らくさい）教会（京都市）です。現在洛西教会25年目です。

旧組合教会の岡山博愛会教会で牧師・更井良夫から洗礼を受け、神学部在学時は、旧組合教会の同志社教会に通い、また最初の赴任地は旧組合教会の紅葉坂教会でした。

以後、鴨東教会、洛西教会という旧同胞教会で通算31年、牧師として働いています。本研究会に参加して、自分の信仰を振り返る機会が与えられたと感謝しています。

余談ですが、鴨東教会、洛西教会、それらの教会の親教会になる京都丸太町教会、さらに、私が学んだ同志社大学の校祖・新島襄の墓のある若王子、それぞれの最寄りのバス停は、京都市バス循環系統204号で繋がっています。私にとっては特別なバス路線です。

私が今働いている洛西教会は1909年、京都丸太町教会の家庭集會に端を発して創立された教会です。当時家庭集會を営まれた京都丸太町教会員は転勤で大阪に転居され、大阪でも家庭集會を持たれ、そこで扇町教会（大阪市）が1910年に創立されました。両教会のそれぞれの教会百年史にこの報告がなされています。

洛西教会は480坪の敷地を所有し、北700メートルのところには北野天満宮、北1.5キロメートルのところには金閣寺（鹿苑寺）があります。

第11回研究会発表

2024年9月の研究発表の課題は『機関紙同胞』239号（1929年6月1日刊）から254号（1931年4月1日刊）までを扱うことでした。

まず『歴代内閣・首相辞典』（吉川弘文堂 2009年）より、当時の時代状況を調べました。

1929年は立憲民政党・浜口雄幸内閣でした。この項を抜き書きすると、財政の整理、緊縮、海軍強硬派の台頭とあります。

1930年にはニューヨーク株式市場が暴落し、世界恐慌へ。

1931年には第二次若槻礼次郎内閣、柳条湖事件、日中戦争、満州事変へ。

以上の記述よりすれば、戦争が身近に差し迫る世情であっただろうと推察します。そして当時の時代状況は、今の時代に似ているのではないかというのが私の抱いた印象です。

『機関紙同胞』を読んだ印象ですが、それは福音伝道、宣教活動にとどまらず、具体的にさらに、献金依頼のために用いられてきたのではないのでしょうか。上記の時代状況を反映して冒頭の説教には「殺人的不景気、失業者の群れ、餓死線上の日本の歳末」といった文言が見られます。（今の時代からは、表現として望ましいと到底思えませんが、一方で）この時代状況を的確に表している表現であるとも思いました。

『機関紙・同胞』248号には「神の国運動の宣言」、249号には「神の国運動」についての賀川豊彦の文章が残されています。同胞教会と賀川の関係は近い関係にあったのでしょうか。第11回研究会では、戒能信生牧師から「同胞教会の神学と賀川の信仰とは同じではないが、伝道のためなら、なんでも受け入れるというのが、当時の同胞教会の姿勢であった」といった趣旨の発言がありました。

『機関紙同胞』の資料をすべて精査してはいませんが、これまでの研究会を通して、そして今回の私の担当分を振り返って思うことに、日本社会において、キリスト教界の福音宣教は決して安泰ではなかったということ。教勢拡大、それは、教会の財政の安定を図る点において、今も昔もその状況はあまり変わらないの

ではないかと思えるのです。私が担当した時代の状況は、不況、戦争を通して、日々の生活基盤、財政に、行き詰まり感がたゞよう只中にあったのではないかと思います。克己献金も本来の趣旨から違う意味合いで、教会を維持するために献金の呼びかけがなされてきたのではないかと思います。

1938年の「国家総動員法」に始まり、後に国家による宗教統制「宗教団体法」という想像を絶する圧力を受ける中で、必死になって教会を存続、延命するために、さまざまに伝道という大義を立てた策を講じてきたのではないかと思います。大陸移住も、キリスト教伝道だと正当化されてきたのではないのでしょうか。

「藤本宮江」と「中島重」

洛西教会員に藤本宮江がいました。2014年1月に召天された方です。(今年で召天10年になります。)晩年になって、滋賀県の教会から娘さんと共に、転入会されました。藤本宮江は大阪市内でひとり暮らしをされており、私はよく大阪まで家庭訪問をしました。施設に入居されてからもその施設への訪問を続けました。

藤本が最期まで私に訪問の度に言い続けられたことがあります。それは、「賀川を赦すことができない。賀川からの謝罪の言葉が一言もなかった」というこのことです。藤本夫妻は賀川の勧めを受けて、朝鮮半島に渡られました。大変なご苦労をされました。4人のお子さんを現地で亡くされました。詳細は1981年の『福音と世界』(新教出版社)の「知られざる教団史の断面」で戒能信生牧師が日本基督教団の資料から掘り起こされ、分析をされていますが、その記事の中に、藤本夫妻のことが記録されています。さらに、石浜みかる著『証言・満州キリスト教開拓村』(2014年日本キリスト教団出版局)にも、藤本宮江の証言が掲載されています。

私には、賀川を批判できる資格はありません。しかし、藤本宮江の私に言い遺されたあの言葉は極めて重いものがあると思っています。戦争中のほかのキリスト者たちはいったいどうであったのかと思わざるを得ません。

私から遡って4代前の者に中島重(なかしましげる)がいました。5代前の柳井重宣の次男です。中島家に実子がいなかったため、柳井家から2代続けて、中島の家に養子を出しました。そのうちの一人が重です。今年10月、岡山県高梁市広瀬に残されている柳井の家に立ち寄りました。その家にある『岡山県人名辞典』(1995年山陽新聞社)の「中島重」の項を検索すると、「賀川豊彦の感化を受け、同志社労働ミッションを発足させた。キリスト教社会主義、学生キリスト教運動

の指導をした」と、記述されています。そして、「太平洋戦争中は、戦争容認の立場」にあったとも記されていました。私は父・繁彌にこの記述について尋ねたところ、父は、重の長女・中西珠子に以前このことについて聞いたが、「そのようなことはない」と否定したとのことでした。しかし、私はそれは違うのではないかと思っています。

今から40年程前、私が大学生時代に通った同志社教会で、教会百年史の刊行にむけて、資料整理をするとのことで、当時の牧師・佐伯幸雄の要請を受けて、ひと夏、戦前、戦中の同志社教会の週報から礼拝記録を手書きでまとめたことがありました。その時に、何度か、中島重が同志社教会の主日礼拝の説教を担当していることが分かり、その説教題に大政翼賛会的な説教題がつけられているのに目が留まりました。先の人名辞典の中島の項の「戦争容認の立場」は、どんな資料に基づいて記述されたのかは、分かりませんが、首肯せざるを得ないと考えています。

私の信仰とは

私はこれまで日本基督教団の教師として35年働いてきました。1993年鴨東教会着任時、名誉牧師・廣澤勝彦は私に繰り返し同じことを私に言われました。「教会の入口の扉が風で開いたり閉まったりする。そして会堂には誰も人が集まらない」という夢を見るとのことでした。今から思えば、それは、廣澤の見た戦争中の夢ではなかったのかと想像します。

洛西教会の境内地に八重桜の古木があります。今年の秋、この木は老齢で枯れてしまいました。来春、切り倒す予定にしています。この古木は数年来勢いが衰えてきました。それと同時に、同じ根本から新しい幹が次つぎと生えてきました。そして、八重桜とは違う、葉、花を咲かせるようになりました。しかし、根は同じです。お世話になっている植木屋さんに聞いたら「先祖帰り」と言われました。「境内地のこの八重桜はもともとは日本桜から品種改良されたものらしく、晩年になり、もとの日本桜に還ったのではないかと」と言われたのです。驚きました。そして今秋、この日本桜の葉は八重桜との別れを惜しむかのような、実に深い味わいのある紅葉へと色づいたのです。これは私の勝手な思いこみではあるのでしょうか。

私から5代前の柳井重宣は新島襄との出会いでキリスト教に入信しました。その時の様子を柳井の家では今でも「耶蘇にかぶれた」と言い伝えています。かぶ

れるとは、いつのまにか、もとの「さや」に納まるということのあるいは暗示しているのかもしれませんが。

「先祖帰り」「もとのさや」それらは、自分の信仰に照らし合わせると「天皇制」に回帰することを指しているのかもしれませんが。

京都特有の言い回しなのでしょう。自分が所属している教会についてよく「うちの教会」という言い回しが使われます。よく言えば教会への帰属意識が深いとも言えますが、気になる言い回しではあります。

洛西教会での在職期間が長くなり、教会が所属している町内会との日頃の交わりが濃くなってきました。そこでは、「天皇制」にかかわる事柄とどう向き合うかが問われ続けています。私が死んだのち、後の歴史家に私の生き様が評価されるようなものではないと自認していますが、私のこれまでの35年の歩みは後の人からは、大いに批判されるものであると薄々感じています。本研究会とのかかわりあいを通して、自らの生き方が厳しく問われ、今更、神の前に、自らの至らなさど恥ずかしさを覚え、顔を上げることができません。

本研究会にご尽力されました、外谷悦夫牧師、戒能信生牧師、原誠牧師、原牧人牧師、

木村拓己牧師、西之園路子牧師、平山正道牧師、岡田仁牧師、依田郁子さん、池田勝則さん、藤田和也さん、ご助言をいただいた水谷誠牧師に心より感謝と敬意を表します。

ありがとうございました。